



# 日本植物分類学会 ニュースレター

No. 35

Nov. 2009

## 目 次

### 諸報告

日本植物分類学会 2009 年度第 2 回評議員会議事抄録.....	2
日本植物分類学会 2009 年度臨時総会議事抄録.....	3
第 2 回日本・中国・韓国合同分類学シンポジウム 報告.....	3
日・中・韓合同シンポジウム参加の感想.....	3
庶務報告 (2009 年 8 月～10 月).....	4

### お知らせ

会費納入のお願い.....	4
2009 年度日本植物分類学会講演会のご案内.....	5
日本分類学会連合第 9 回公開シンポジウムのご案内.....	6
日本植物分類学会第 9 回大会および 2010 年度総会のご案内.....	7
これまでの大会発表賞を振り返って.....	11
2010 年度野外研修会開催地の募集.....	13
秋山茂雄『極東産スゲ属植物』図版標本の選定と目録の発行.....	13

### 寄稿

学名のラテン語 (3).....	14
------------------	----

### 研究での失敗談

～ふりかえれば, 失敗～.....	15
-------------------	----

### いきもの便り

コマツヨイグサに似たアカバナ科植物.....	17
日本植物分類学会第 9 回大会「発表・参加申込書」.....	19
会員消息.....	20

## 諸報告

## 日本植物分類学会 2009 年度第 2 回評議員会議事抄録

庶務幹事 東 浩司

会場：山形大学小白川キャンパス教養教育 1 号館 131 教室

日時：2009 年 9 月 19 日 12:00 ~ 13:00

参加者：評議員 () 内は被委任者 評議員出席 7 名, 委任状出席 6 名

出席：邑田 仁, 野崎 久義, 藤井 紀行, 永益 英敏, 五百川 裕, 黒沢 高秀, 遊川 知久

委任状出席：西田 治文 (議長), 高橋 英樹 (議長), 瀬戸口 浩彰 (議長), 田村 実 (議長), 角野 康郎 (議長), 門田 裕一 (議長)

幹事会・委員会委員長 () 内は役職 出席 9 名, 欠席 5 名

出席：戸部 博 (会長), 東 浩司 (庶務), 堤 千絵 (会計), 東 隆行 (ニュースレター), 坪田 博美 (ホームページ), 永益 英敏 (編集委員長: 評議員を兼務), 梶田 忠 (植物分類学関連学会連絡会・日本分類学会連合), 西田 佐知子 (和文誌), 村上 哲明 (学会賞選考委員会委員長)

欠席：秋山 弘之 (図書), 篠原 渉 (講演会), 角野 康郎 (絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会委員長), 柏谷 博之 (絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会委員長), 伊藤 元己 (植物データベース専門委員会委員長)

1. 評議員会開催にあたり, 戸部会長から挨拶があった。
2. 東庶務幹事により, 定足数が確認された。評議員出席 7, 委任状出席 6 で本評議員会は成立した。
3. 評議員会議長として永益英敏氏が選出された。議事録署名人として藤井紀行氏と東隆行氏が選出されたが、事後に東隆行氏に代わり野崎久義氏を議事録署名人とした。
4. 報告事項
  - 4.1 日・韓・中 3 カ国植物分類学会合同国際シンポジウム 状況報告。
  - 4.2 日本植物分類学会講演会 計画報告 (2009 年 12 月 5 日, 大阪学院大学にて)。
  - 4.3 庶務関係報告 事務連絡等。
  - 4.4 会計関係報告 会費滞納者の状況等報告。
  - 4.5 各種委員会に関する報告
    - (1) 学会賞 選考状況
    - (2) 編集委員会 『APG』発行・編集状況, ISI 登録申請予定。『分類』の発行・編集状況, カラーページ料無料化。
5. 審議事項
  - 5.1 名誉会員の推薦について  
名誉会員有資格者が 5 名いることが報告され, 2010 年 3 月の総会で推薦することが承認された。未納会費がある有資格者 3 名については推薦を見送り, 会費納入を促すこととなった。
  - 5.2 3 月末の退会希望について  
事務作業の軽減を図るため, 3 月末までに退会届を出した会員は場合によっては前年 12 月末での退会扱いとしてもよいことが承認された。
  - 5.3 銀行からの会費納入方法について  
銀行からゆうちょ銀行への振込みが可能になったので, 会費納入に関して導入したいとの提

案があり、審議の結果、事務作業に問題が無ければ、導入の方向で作業することとなった。

#### 5.4 次期大会発表賞選考委員会委員長について

審議の結果、黒沢評議員が次回委員長に承認された。

## 日本植物分類学会 2009 年度臨時総会議事抄録

庶務幹事 東 浩司

会場：山形大学小白川キャンパス教養教育 1 号館 131 教室

日時：2009 年 9 月 19 日 13:00 ~ 13:10

1. 総会に先立ち戸部会長から挨拶があった。
2. 東庶務幹事より臨時総会出席者数が 14 名であることが報告された。
3. 野崎久義氏が議長に選出された。
4. 審議事項

#### ・議案 2009-2010 年度監事について

東庶務幹事より、2009-2010 年度監事について、中村直美氏（茨城大）と綿野泰行氏（千葉大）が候補として推薦され、挙手により採択を行った結果、賛成 14 票、反対 0 票で承認された。

## 第 2 回日本・中国・韓国合同分類学シンポジウム 報告

邑田 仁（東京大学）

昨年第 1 回目を札幌で開催した日・中・韓合同分類学シンポジウムの第 2 回目が 10 月 22 ~ 23 日の日程で、中国北京の中国科学院を会場として実施された。シンポジウムのタイトルは第 1 回と同様に「Symposium on East Asian Plant Diversity and Conservation 2009」とされ、発表は口頭発表 14 題（各 30 分）、ポスター発表 12 題であった（発表タイトルは日本植物分類学会 HP に掲載）。参加者は日本、韓国から 10 名以上、中国からも多数あり、合計 100 名近くであったと思われる。中堅から若い研究者による意欲的な発表が多く、参加者間の交流も盛んに行なわれて、東アジアの研究を連携して進めるうえで実質的に役立つものであったと見られる。来年第 3 回は韓国、2011 年は日本で開催する予定となっており、さらに充実したシンポジウムとなることが期待される。なお、日本からは実行委員として、邑田仁（東大）、綿野泰行（千葉大）と瀬戸口浩彰（京大）が参画した。

## 日・中・韓合同シンポジウム参加の感想

常木 静河（首都大学東京）

10 月 21 日から 24 日まで、北京郊外の香山（シャンシャン）にある中国科学院植物研究所で開催された日本、中国、韓国の合同分類学シンポジウムに参加させていただきました。現地は、東京よりだいぶ緯度が高いため、10 月下旬というのに紅葉真っ盛りでした。黄櫨樹（マルバハゼ）の葉が赤く染まっていたとてもきれいでした。さて、今回の主催は中国。すべてがダイナミックで、圧倒されました。

宿泊は、五つ星のホテル。バックパッカーさながらの恰好で来てしまった私は、少々場違いさに冷や汗でした…。最初の日はお昼に空港につき、ホテルで受付を行い、香山で行われている紅葉祭りへ繰り出しました。お豆腐でできた麺や抱えきれないほどの甘栗など、紅葉とともに、北京（？）の味も堪能しました。一方で、紅葉祭りの通りの横には塀で隔てられたバラックが立ち並び、中国の格差を象徴

しているような気がして、繁栄の裏舞台を見たような少し複雑な気持ちになりました。

次の日から、いよいよシンポジウム。各国の方々の発表はいい刺激になりました。とても広範囲からサンプリングを行って、遺伝構造を調べた系統地理を行っている研究室が多かったです。いくつもおもしろい発表があったのですが、中国の武漢大学の黄双全教授が行っている研究は聞いていてとてもわくわくしました。研究は、「雨」が花の構造を変化させる要因になりうるかどうかというテーマでした。水にさらされたときの花粉生存率や雨を避けるような花の構造の評価を80種の高等植物を対象に調べ、花粉の雨に対する耐性が弱いほど、雨をよける花の構造は強くなっていることを示していました。フィールドで感じた素朴な疑問に、研究としてじっくり取り組んでいる黄双全教授はとてもフランクな方で、研究姿勢も本当に素敵でぜひ見習いたいなぁと思いました。自分もそんな方々に混ざって、小笠原産タブノキ属植物の適応放散的種分化について発表させていただきました。

開花期の違いや生育環境の違い、分布する列島の違いといった遺伝子流動を制限する要因に着目し、遺伝構造を調べていくと、今までの形態情報のみでは分からなかった6つの多様なクラスターが存在しているのだということ英語で発表しました。最初は緊張してどうなるかととても不安でしたが、出発前に村上先生とポストクの佐伯さんに診ていただいたおかげで無事に発表を終えることができました。発表後に、自分の研究を通して中国や韓国の研究者の方と話す機会が持てたことは、とてもいい経験になりました。

夜は、いろいろな所へ皆で連れて行って頂きました。ジャングルの様なレストランには、巨大な観葉植物の陰に泳ぐチョウザメ(?)がいて驚きました。レストランは、広すぎてトイレに立っただけで迷子になりました。やっとの思いで席へ着いた時は、ホッとしました。

中国や韓国の方々はとても親切で日本人の私たちのことをやさしく気遣って下さいました。今度、日本でやるときにもこんな風におもてなしできたらいいなぁと思いました。

## 庶務報告 (2009年8月～10月)

庶務幹事 東浩司

庶務報告では学会が交わした契約、転載許可、連絡、行った会議などで、ニュースレターの他の記事で紹介されていないものをお知らせしています。

- ・特許庁の「特許法30条に基づく指定学術団体に対する活動状況調査について」に回答した。(8月10日)
- ・日本学術会議より協力学術研究団体フォローアップ調査の依頼があり、回答した。(8月26日)
- ・日本学術会議より学士課程教育の質保証に関する学協会の取組み状況についてアンケート調査があり、回答した。(10月28日)

## お知らせ

### 会費納入のお願い

会計幹事 堤千絵

本学会の会費は前納制で、前年の12月末日までにお納め頂くことになっております。会員の皆様の会費納入状況はニュースレター本号の送付宛名の右下に「納済年度：○○○○」として示されております(自動振替をご利用の方は数字の代わりに「自動振替」と記入されています)。例えば、「2008」の方は2009、2010の2ヵ年分をお納めいただくこととなります。こ

の数字が2010未満の方は、2009年12月末日までに同封の郵便振替用紙にて、該当する金額を納入頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。

●年会費 一般会員 5,000 円, 学生会員 (※) 3,000 円, 団体会員 8,000 円

●郵便振替口座 口座番号 00120-9-41247

加入者名 日本植物分類学会

本学会では自動振替をご利用頂けるようになっております。ご希望の方は、会計幹事までお知らせください。ただし、2010年度分の引き落とし申込み手続きはすでに終了しておりますので、ご利用は2011年度分からになりますので、ご了承下さい。

その他、会費納入に関してご不明な点がございましたら、会計幹事（連絡先はニュースレター巻末）までお問い合わせください。

※ 2007年度第2回評議員会において、これまで必ずしも明確でなかった「学生会員」の取り扱いが明確にされました。例えば、学振DCの方は基本的に一般会員扱いとなります。会費振替用紙通信欄に指導教員のサインがない場合、学生会員とは認められません。不足分は未納会費として取り扱われますのでご注意ください。自動振替を利用されている学生会員の方は、前年度末（2010年度分については2009年12月末日）までに、指導教員から会計幹事宛に学生会員であることを承認する旨のメールを送信するようにしてください。

## 2009年度日本植物分類学会講演会のご案内

講演会担当委員 篠原 渉

2009年度の日本植物分類学会講演会を次のとおり開催します。なお、会場は大阪学院大学の林一彦先生にお世話いただきます。

【日時】2009年12月5日（土）午前10時～午後4時40分

【講演会場】大阪学院大学 2号館地下1階2号教室（02-B1-02教室）

〒564-8511 大阪府吹田市岸部南2丁目36番1号（電話：06-6381-8434）

### 【プログラム】

10:00-10:05 ご挨拶

10:05-11:05 佐藤 博俊「DNAから分かるキノコの隠れた種と共生植物との相性」

11:15-12:15 海老原 淳「配偶体研究から見えてきた、シダ植物のもう1つの世界」

(12:15-13:20 昼食)

13:20-14:20 厚井 聡「極限環境へ適応したカワゴケソウ科の形態進化」

14:30-15:30 田村 実「チシマゼキシヨウ属の系統と分類」

15:40-16:40 秋山 弘之「屋久島を彩るコケ植物の多様性」

### 【その他】

講演会終了後、大阪学院大学職員食堂（17号1階）で懇親会を行います。

### 【会場までのアクセス】

JR東海道本線岸辺駅あるいは阪急京都線正雀駅から大阪学院大学までともに徒歩5分。

[http://www.osaka-gu.ac.jp/p\\_student/index.html](http://www.osaka-gu.ac.jp/p_student/index.html)の「交通アクセス」と「キャンパスマップ」をご覧ください。

### 【講演要旨（執筆は各演者）】

「DNAから分かるキノコの隠れた種と共生植物との相性」佐藤 博俊（森林総合研究所関西支所）

今回の講演では、形態では種の判別が難しいキノコ類について、DNA 情報を用いることで効果的にその種を識別する手法について紹介する。また、菌根性キノコ類と共生植物との相性を DNA 情報から探る方法についても紹介したい。

「配偶体研究から見えてきた、シダ植物のもう 1 つの世界」海老原 淳（国立科学博物館植物研究部）

シダ植物の配偶体（前葉体）は、微小なサイズゆえ胞子体に比べて研究対象となる機会が少ない。特に野生配偶体の分布や生態は従来ほとんど研究されることはなかった。分子同定によって見えてきたシダの新しい世界を紹介する。

「極限環境へ適応したカワゴケソウ科の形態進化」厚井 聡（奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科）

渓流中の岩場という過酷な環境に生育する水生のカワゴケソウ科は、種子植物でありながらコケのような変わった形をしています。この植物の適応進化の過程を紹介します。

「チシマゼキショウ属の系統と分類」田村 実（京都大学大学院理学研究科植物学教室）

チシマゼキショウ属はユリ科あるいはチシマゼキショウ科に含められる形態的に原始的な単子葉植物である。この属の系統と分類を日本産の植物を中心にして最近の研究結果に基づいて紹介する。

「屋久島を彩るコケ植物の多様性」秋山 弘之（兵庫県立人と自然の博物館）

世界遺産の屋久島は、ヤクスギランドや白谷雲水峡などに代表されるようにコケ植物の宝庫であり、数多くの希少種が報告されています。4 年間の現地調査で得られた成果に基づき、屋久島のコケ植物相が秘める魅力と多様性を紹介します。

## 日本分類学会連合第 9 回公開シンポジウムのご案内

日本分類学会連合担当委員 梶田 忠

日本分類学会連合の公開シンポジウムが下記の日程で開催されます。皆様お誘い合わせの上、是非ご来聴下さい。

タイトル：「生物地理学の未来を考える」

日時：2010 年 1 月 9 日（土）13：30～17：30

会場：国立科学博物館新宿分館

企画：海老原 淳（科博・植物）・岡本 卓（国立環境研）

講演内容：

「淡水魚の分子系統地理の現状と今後の展開」渡辺 勝敏（京大・理・動物生態）

「樹木と共に生きる菌類の生物地理学—生態学的アプローチによる展開」広瀬 大（日大・薬）

「海洋生物の分布データベース—現状と可能性」田中 克彦・藤倉 克則・山本 啓之・丸山 正（JAMSTEC）

「琉球列島の特異な地史と生物地理」松岡 廣繁（京大・理・地鋳）

「植物分類学者から見た生物地理」加藤 雅啓（科博・植物）

## 日本植物分類学会第9回大会および2010年度総会のご案内

第9回大会準備委員会

日本植物分類学会第9回大会を以下のように開催します。

〔会場〕 愛知教育大学 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1 (口頭発表, ポスター発表, 総会)  
(アクセスは大学ホームページ参照。http://www.aichi-edu.ac.jp/access.html)  
自然科学棟3F (編集委員会, 評議員会)  
生協食堂 (懇親会)  
名古屋市科学館生命館サイエンスホール 名古屋市中区白川公園 (公開シンポジウム)  
(地下鉄東山線伏見駅から南に約500m)

〔日程〕 2010年3月25日(木) ~ 3月28日(日)

3月25日(木) 午後 編集委員会, 評議員会 (愛知教育大学自然科学棟)

3月26日(金) 午前 口頭発表 (大会発表賞エントリー者)

午後 口頭発表, ポスターセッション (愛知教育大学)

3月27日(土) 午前 口頭発表 (2会場並列になるかもしれません)

午後 総会, 受賞記念講演 (愛知教育大学)

夜 懇親会 (愛知教育大学生協食堂)

3月28日(日) 午前 エクスカーション (瀬戸市海上町シデコブシ自生地)

午後 公開シンポジウム (名古屋市科学館)

〔お問い合わせ先〕 448-8542 刈谷市井ヶ谷町広沢1

愛知教育大学自然科学系生物領域 渡邊 幹男

Tel. 0566-26-2366 Fax. 0566-26-2310

E-mail jsp9@m.auecc.aichi-edu.ac.jp (大会専用)

ちょうど東海地方固有種のシデコブシの開花時期に当たるため、28日午前中は本種自生地へのエクスカーションを行います。そのため口頭発表の枠があまりとれませんので、できるだけポスターでの発表をお願いします。

### 発表の要領

#### ○口頭発表 (一般講演)

発表時間は、講演12分、質疑応答3分の計15分です。発表は、会場備え付けの設備(液晶プロジェクターに接続したWindowsXP, MacOS10.2 各1台)を使用したMSパワーポイントによる発表に限定させていただきます。持ち込みのコンピューターは特別な理由がない限り使用できませんのでご了承下さい。また、プレゼンテーションのためのファイルはMS PowerPoint 2003 (Windows) または 2004 (Mac) で読み込み可能なものとします。ファイルはUSBフラッシュメモリに保存してご持参下さい。ファイルの受付は会場で行います。ファイルの受付時間につきましては、プログラムの確定後に各発表者に大会準備委員会よりお知らせいたします。

## ○ポスター

ポスター発表用パネルのサイズは、横 90 cm × 縦 120 cm です。パネルの下方には 60 cm ほどの空間があります。貼付用テープ等は大会準備委員会で用意します。資料等を置く必要がある方は、発表申し込みの際にお知らせいただければ小机を用意します。

また、28 日午後の公開シンポジウムでは、公開ポスター展示を併催する予定です。ポスター発表で使用されたポスターのうち公開シンポジウムのテーマに関係があり、一般の人に理解しやすいと思われる数点については、賛同が得られれば、公開シンポジウムでも展示して頂きたいと考えております。ご都合がつかなければ、説明者はいなくてもかまいません。ご賛同いただける場合、大会でのポスター発表は招待講演扱いとし、演者の大会参加費は返却いたします。

## 〔発表・参加申込方法〕

大会には日本植物学会会員・非会員を問わず参加していただけますが、発表者のうち演者（口頭およびポスターで実際に発表する方）は特に依頼した場合を除き会員に限ります。非会員の講演者は、発表までに日本植物分類学会への入会手続きをしてください。

発表・参加申し込みに関しましては、必ず電子メールで申込をしてください。本ニュースレター 19 ページの「発表・参加申込書」に従って必要事項を入力し、タイトルを「学会申込」として第 9 回大会専用アドレス [jsps9@m.auecc.aichi-edu.ac.jp](mailto:jsps9@m.auecc.aichi-edu.ac.jp) 宛に添付ファイルで送信してください（添付ファイル名は参加者本人の名前全体をお使いください）。送信してから 3 日間経っても（土日・祝日を除く）大会準備委員会から受信の返事がない場合は、タイトルを「学会申込再送信」とした上、同じメールを送信してください。電子メールを利用できない方は、別紙の「発表・参加申込書」に必要事項を記入の上、大会準備委員会あてに郵送またはファックスしてください。

## 〔大会発表賞へのエントリー〕

大会発表賞（口頭発表賞またはポスター発表賞）にエントリーされる方は、「発表・参加申込書」9. 口頭発表賞・ポスター発表賞へのエントリーの項目で、(1) する、を選択してください。エントリーされた方の発表様式に応じて、自動的に口頭発表賞、ポスター発表賞それぞれの候補者として割り振られます。なお、大会発表賞へのエントリー資格のある方は、日本植物分類学会の会員で、パーマネント・ポストに就いていない若手研究者（ただし年齢制限はありません）で、筆頭発表者かつ演者である方本人です。

## 〔発表要旨〕

発表要旨の原稿は、必ず MS（マイクロソフト）ワードを用いて作成し、MS Word 2003（Windows）または MS Word 2004（Mac）で読み込み可能な形式で保存して下さい。左右は 2 cm、上下は 3 cm の余白を取り、A4 判の用紙 1 枚に 12 ポイント以上の MS 明朝あるいは MS ゴシックのフォントのみを用いて、34 行以内でタイプしてください。発表題目の左には発表番号を印刷するための余白（4 cm）が必要です。発表題目、1 行空白、発表者氏名（かつこ内に所属）、発表者氏名（英語）、1 行空白、要旨本文の順に記入し、実際に発表する演者の右肩に「\*」を入れてください。図や表を入れることは可能ですが、グレースケール原稿は印



刷の際につぶれるおそれがありますのでお避け下さるようお願いいたします。パソコンの機種に依存する特殊文字は、フォントの文字化けなどをおこすおそれがあることをご承知下さい。要旨はB5サイズに縮小して印刷・製本いたします。原稿のファイルは、「発表要旨」とタイトルをつけた電子メールの添付書類（代表申込者の名前全体をファイル名としてください）としてjsps9@m.auecc.aichi-edu.ac.jp宛に送信していただくか、ファイルの入ったCD-Rを下記住所まで郵送してください。送信してから3日経っても（土日・祝日を除く）大会準備委員会から受信の返事がない場合は、お手数ですがタイトルを「発表要旨再送信」とした上、同じメールを送信してください。

なお、印刷の都合で体裁を変更する場合がありますのでご了承ください。MSワードを使って要旨原稿ファイルを作成することが困難な発表者の方がいらっしゃいましたら、事前に大会準備委員会までご連絡下さい。要旨の作成方法をご相談させていただきます。なお、要旨のFAXによる送付は受け付けません。

[申込の締め切り]

発表者：

発表申込・大会参加費振込 1月29日（金）必着（電子メールまたはFax）

発表要旨ファイル提出（電子メールまたは郵便）も同時です。

発表者以外：

大会申し込み・懇親会申し込み・参加費振込 3月5日（金）必着

1月29日までの振り込みは、参加費が割引になります。

[要旨原稿の送付先]

448-8542 刈谷市井ヶ谷町広沢1

愛知教育大学自然科学系生物領域 渡邊 幹男

Tel. 0566-26-2366 Fax. 0566-26-2310

E-mail jsps9@m.auecc.aichi-edu.ac.jp（大会専用）

[参加費送金先]

郵便振替口座番号：00820-3-206654

口座名義：日本植物分類学会第9回大会準備委員会

送金には郵便局備え付けの振替用紙を使用し、必ず振り込み金額の内訳（大会参加費、懇親会費、27日弁当、エクスカーション交通費等）と、払込者と参加者が異なる場合は参加者の所属・氏名を通信欄に記入してください。

[宿泊施設]

大学の所在地は刈谷市ですが、最寄り駅は名古屋鉄道知立駅です。知立駅および刈谷駅付近に宿泊施設があります。各自でご予約下さい。

知立駅から電車で約5分の刈谷駅周辺（本数は少ないが、刈谷駅から大学行きの直通バスも出ています）、電車で約20分の名古屋駅周辺にも多数の宿泊施設があります。各自でご予約ください。

## 〔大会会場へのアクセス〕

新幹線名古屋駅から：名古屋駅（乗り換え 5 分）名鉄名古屋駅（特急 20 分，約 15 分間隔，他に急行もあるが，多くは途中で特急に追い越される）知立駅（駅前から名鉄バス愛知教育大学行き，三好行き，日進駅行きのいずれかで約 20 分，平日日中は毎時 05，20，35，50 分発，休日日中は毎時 05，20，35 分発，朝夕は増発あり）愛知教育大学で下車。

新幹線豊橋駅から：豊橋駅（同一構内にある名鉄線に乗り換えて特急で約 30 分，約 15 分間隔，他に急行も 1 時間に 2 本ある）知立駅，あとは名古屋駅からと同じ。

中部国際空港から：中部国際空港（名鉄電車，神宮前駅乗り換えで 45～60 分）知立駅，または中部国際空港（知多乗合バス，8:30，10:10，11:15，日中約 1 時間毎，18:45，19:55，20:55，21:50 発，刈谷駅経由約 65 分，ただし発車時刻は変更される可能性があるので，各自でご確認ください）知立駅，あとは名古屋駅からと同じ。

JR 東海道線から：刈谷駅（北口から名鉄バス，平日は 7:11，7:41，8:00，8:29，9:14，10:04，11:04 発，休日は 7:46，8:18，9:06，10:06 発，約 35 分）愛知教育大学，または刈谷駅（名鉄電車約 5 分，15 分間隔）知立駅，あとは名古屋駅からと同じ。

名古屋市営地下鉄鶴舞線から：直通運転の名鉄豊田新線日進駅（駅前から名鉄バス，平日は 7:11，8:05，8:38，9:49，10:24，11:24 発，休日は 7:23，8:09，8:39，9:39，10:24，11:24 発，約 20 分）愛知教育大学で下車。

自家用車利用の場合：東京方面からは伊勢湾岸道を豊田南インターで出て約 30 分，または東名高速道を三好インターで出て約 20 分で愛知教育大学，大阪方面からは伊勢湾岸道を豊明インターで出て約 10 分，または東名高速道を三好インターで出て約 20 分で愛知教育大学，正門脇の守衛所で「日本植物分類学会大会参加」と言って臨時入構許可証をもらってください。構内に駐車場は多数ありますが，いずれも会場からやや離れています。また桜の開花期に重なるため，土曜日はかなり混雑する可能性があります。

## 〔参加費〕

大会参加費（発表要旨集 1 部代金を含む）：

1 月 29 日までに振込の場合	一般 4000 円，学生 2000 円
1 月 30 日以降振込と当日参加申込の場合	一般 5000 円，学生 3000 円
追加発表要旨集	1 部 1000 円

懇親会参加費：

1 月 29 日までに振込の場合	一般 7000 円，学生 5000 円
1 月 30 日以降振込と当日参加申込の場合	一般 8000 円，学生 6000 円

エクスカーション交通費：

刈谷駅，知立駅または愛知教育大学からバスを利用する場合，1500 円。帰りは公開シンポジウム会場または名古屋駅までお送りします。

名古屋方面からは直接現地に行くこともできます。その場合は参加無料。

3 月 27 日昼食弁当 500 円

弁当は予約制です。参加申し込みの際に一緒に振り込んでください。

## 〔昼食〕

3月26日：生協食堂が営業しています。生協食堂を利用されない場合は、近くに適当な場所がありませんので、昼食を用意されることをおすすめします。

3月27日：春期休暇中で日中は生協食堂が営業しませんので、弁当（500円）を用意します。

3月28日：各自ご用意ください。

〔公開シンポジウム〕（共催：日本動物分類学会，愛知県，名古屋市）

3月28日午後13時30分～16時30分 名古屋市科学館生命館サイエンスホール

公開シンポジウムは、2010年10月に名古屋で開催される生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）に向けて、当初動物分類学会と共催で生物多様性研究の重要性を訴える内容のものにしようと考えていましたが、最近になって愛知県も名古屋市も自然史博物館／生物多様性センターの必要性に気づいてきたようです（実は、愛知県／名古屋市はこのような機関がほとんどない、生物多様性研究最「後進」地域です）、更に愛知県と名古屋市を共催に加えて、「生物多様性保全における拠点機関の役割－COP10に向けて」というテーマで開催することにします。講演者と演題については現在調整中です。併催のポスター展示については、ポスターの項をご覧ください。

当初予定していた生物多様性研究の重要性については、名古屋市で9月に開催される日本植物学会大会の際にとりあげる方向で検討されています。

## これまでの大会発表賞を振り返って

第5回大会発表賞選考委員長 黒沢 高秀

大会発表賞は次回大会で5回を迎える。ほぼ同時期に発表賞（ポスター賞）の連続的選考を始めた日本生態学会では、担当ワーキンググループや部会が2度検討や提言を公表している（日本生態学会誌 55: 209-214; 日本生態学会ニュースレター 19: 5-6）。そろそろ、これまでの選考方法や受賞者の特徴を振り返って、今後のために検討を加えても良い頃であろう。大会発表賞の目的は、「パーマネント・ポストに就いていない若手研究者で、優れた研究を行い、それを大会でうまく発表した人を顕彰することによって、大会を盛り上げ、植物分類学分野の若手を奨励すること」（ニュースレター 19: 2）と、「発表の質の向上」（ニュースレター 33: 6）である。これまでの選考方法には以下のような特徴がある。(1) 評議員と前年の受賞者が選考委員を務める。評

議員は8人が選挙で選ばれるが、分野や地方のバランスを考えて合議により追加選出をしている。評議員が選考委員を行うのは、全体として分野や地方を広く網羅し、バランスのとれた集団であることを期待されてのことである。前年受賞者は、審査過程の透明性の向上、受賞者に審査の大変さを実感してもらう等の目的で加わっている（ニュースレター 25: 4）。また、(2) 選考委員が全発表を審査する、(3) 内容5点、発表のうまさ3点の平均点で採点する、という点も特徴である。

これまでに15名が受賞をした。受賞回数制限はないが、今のところ一人一件ずつである。分類群は種子植物が6件と多いが、学会で扱うほぼすべての大分類群を網羅している（図1）。藻類は3件と健闘している。手法を見ると、15件は遺伝子を調べたものであり、残りの1件も以前遺伝子を調べた結果を元に

形態を調べて命名に踏み込んだものである。以下、隔離（交配実験や交雑可能性の検討など）と形態（微細構造を調べる、新たな識別形質を発見するなど）がそれぞれ4件、命名が2件と続いている。約半分の7件は2つ以上の手法を用いており、内2件は3つの手法を用いている。なお、手法の分け方にはいろいろと考えがあると思う。また、筆者が記憶や要旨を頼りに分けているので、実態と多少異なる可能性がある。所属は東大と京大が多いが、7つの大学・研究機関に渡っている（表1）。受賞者は、受賞後2、3年の内にパーマナント・ポストを得ているケースが目立つ。また、既に3名が後に本学会の奨励賞を受賞している。

これらのことから、若手を奨励するという賞の目的はおおむね達成しており、何人かの受賞者は、受賞後に本学会や分類学に貢献した、あるいは貢献が大きく期待されると認められる研究者になったことを示していると思う。これまでに、受賞発表は十分な（多くの場合圧倒的な）量のデータが収集されていることや（ニュースレター 29: 9）、研究の背景、意義を簡潔にわかりやすく説明していることが共通することが指摘されている（ニュースレター 33: 6）。分類群や所属で幅広く受賞者がでてきていることから、これらにより有利不利が働かず、真にすぐれた発表が受賞してきたことが窺える。ただし、ほとんどが遺伝子を扱った研究であった。単に、遺伝子を扱った研究に特に優れたものが多かった可能性は

否定できないが、遺伝子を扱っていないすぐれた研究が受賞から漏れていないか、今後は一定の確認が必要かもしれない。大会を盛り上げる、発表の質を向上させるという目的に関しては、だいたい達することができたことが各年度の委員長により本誌に報告されている。主観的ではあるが、私も同様に感じている。

このように、これまでの大会発表賞は、本学会の選挙や規模などの特徴をうまく生かしたユニークな選考方法をとっており、目的をおおむね達していると考えられる。そのため、次回以降もこれまでの選考方法を踏襲すべきであると思う。

これまで目的通りに選考できたのは、初代委員長を中心に考案した最初の制度設計がすぐれていたからと考えられるが、エントリーしたすべての発表をなるべく正當に評価するという作業をこなした歴代委員長や選考委員の力量によるところも大きいであろう。また、選考委員が選考に集中できる環境が作られなければ目的に沿う選考ができたか疑問である。その意味で、口頭発表を最初に集める、初日に十分なポスター発表の時間を取るなど、選考環境を最大限整えてくれた大会準備委員会と、準備、集計、表彰など選考以外のすべて作業を負担してくれた幹事の協力は大変重要なものである。次回大会においても、関係各位のこれまで通りの協力をお願いすると共に、若手研究者のすぐれた研究の沢山の応募を期待したい。

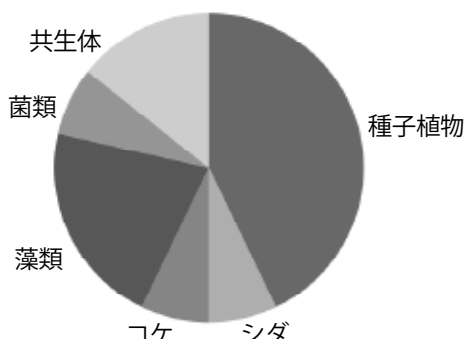


図1. 分類群ごとの受賞件数

表1. 所属ごとの受賞件数

所属	件数
東京大	5
京都大	4
日本女子大	2
国立環境研	1
慶応大	1
琉球大	1
国立科学博物館	1

## 2010 年度野外研修会開催地の募集

庶務幹事 東 浩司

2010 年度野外研修会開催地を募集いたします。野外研修会は現学会の母体の一つである植物分類地理学会創立当時の 1933 年から開催されてきた伝統ある行事です（村田 2001, ニュースレター 1: 15-17 および黒沢 2008, ニュースレター 30: 5 を参照）。学会統合後も年 1 回開催しており、来年度も開催を予定しております。2001 年以降は、埼玉県秩父、宮城県宮崎～延岡、徳島県那賀川沿い・外ノ牟井ノ浜、愛知県・岐阜県東濃地方、岐阜県徳山ダム周辺・伊吹山、鹿児島県種子島、岡山県・広島県阿哲地域、福島県安達太良山・裏磐梯、高知県瓶が森・錦山を開催地として、5 月から 11 月の間の適期に 1 泊 2 日または 2 泊 3 日で実施しております。地元の植物を多くの同好の方々に紹介いただき、地域フロラに関する研究成果を共有し、実物を前にして議論して、植物分類の理解を深めるよい機会となるかと思えます。野外研修会の開催をお引き受けくださる（あるいは場合によっては引き受けても良い）という会員の方がおられましたら、2009 年 12 月 21 日までに庶務幹事宛（下記）にご連絡をお願いいたします。

〒 606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学理学研究科生物科学専攻植物系統分類学内

日本植物分類学会事務局（庶務幹事 東 浩司）

TEL & FAX : 075-753-4125 e-mail : azuma@sys.bot.kyoto-u.ac.jp

## 秋山茂雄『極東亜産スゲ属植物』 図版標本の選定と目録の発行

加藤 ゆき恵（北海道大学）

秋山茂雄の大著『極東亜産スゲ属植物』の図版の基になった標本を選定し、標本目録を作成しましたので、ご報告します。

秋山茂雄の大著『極東亜産スゲ属植物』は 1955 年に刊行された、極東アジア地域に産するスゲ属植物の分類学的研究の総括である。各論で約 450 分類群のスゲ属植物について種の特徴や分布域などが詳細に記述され、別冊の図版には 248 のプレートに 339 分類群の線画が収録されている。これらの図版は全て実際の標本を基にして非常に細かい部分まで精密に描かれているが、基となった標本の採集情報は本文中にも図版にも記載されていない。地域特産種やある種の地域変異を検討する際に、標本の産地情報は不可欠である。また、『極東亜産スゲ属植物』刊行時と現在では種の範囲や解釈が異なるものもあることから、データベース作成と標本目録の発行を目的として、本書の図版標本の選定を行った。

標本調査は、秋山茂雄が在籍していた北海道大学理学部植物標本庫から移管された北大総合博物館陸上植物標本庫（SAPS）秋山コレクションを中心に行い、刊行以前に極東アジア地域で採集された標本と図版の線画を比べて、同じ形態のものを選定した。また、北大の後に秋山が赴任した金沢大学の植物標本庫（KANA）、「まえがき」の中で言及されている北海道大学農学部植物標本庫由来の SAPS 通常配架、東京大学（TI）、京都大学（KYO）の標本も検討した。

339 分類群中 316 分類群（確定できないものを含む）の図版の基となる標本を選定し、これに加えて 5 分類群の標本産地を明らかにした。大半は SAPS 秋山コレクションに収蔵され、

SAPS 通常配架からは 2 分類群, KANA からは 9 分類群, TI からは 20 分類群が確認された (目録では 18 分類群としているが 20 分類群の間違いであった)。KANA で確認された標本は秋山が金沢大学に転出した際に移されたもので, TI の図版標本群は多くが早田文蔵命名種, 大井次三郎命名種あるいは台湾産・朝鮮産であった。

選定した全ての標本の採集データ (採集地, 年月日, 採集者), 標本番号, 標本ラベルの種類などをカード形式にまとめた標本目録を, 北海道大学総合博物館マテリアルレポート (The Hokkaido University Museum, Material Report No.6) として 2009 年 3 月に発行した。

また, 冊子の内容を全て PDF にしたデータを北海道大学学術成果コレクション HUSCAP で公開している。1 ページ目には書誌事項が記載されているため, 2 ページ目以降を A4 で両面印刷すると冊子体とほぼ同じ状態になる。また, PDF の「しおり」タグでページ区分, 図版番号の区切りなどを付けているので, 活用していただくと幸いである。

画像データを含めたデータベースの公開を目指し, 現在作業を進めている。公開時期が決定したら改めてお知らせしたいと考えている。

北海道大学学術成果コレクション HUSCAP <http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/>

左バー「研究科等」→「総合博物館」→「雑誌発表論文等」, または検索ボックスで「秋山茂雄」で検索

PDF データ利用が不可能な場合は, 2010 年 (平成 22 年) 2 月までに, 下記まで送料分の切手を添えてお申し込みいただければ, 冊子体を送付致します。なお発行部数に限りがあるため, できるだけ PDF データを利用していただくと有り難いです。

送料: 1 冊 290 円 / 2 ~ 3 冊 340 円 (1 冊は約 330g, ゆうメール (冊子小包) でお送りします)

申し込み先: 〒060-0003 札幌市中央区北 3 条西 8 丁目

北海道大学植物園学生室 加藤 ゆき恵

申込書記載内容: 必要冊数, 氏名, 住所, メールアドレスまたは電話番号 (問い合わせが必要な場合に使用)

※お送りいただいた個人情報は本冊子の送付にのみ用い, 他の用途には使用致しません。

---

## 寄稿

---

### 学名のラテン語 (3)

永益 英敏 (京都大学)

#### 科の学名

国際植物命名規約には「科名は名詞として用いられる 1 つの複数形の形容詞である (第 18.1 条)」と書いてある。そして「属の学名の属格単数形から, その属格単数形の語尾変化の部分 (中略) を語尾 -aceae に代えて, つくられる (第 18.1 条)」。この形容詞の語尾がラテン語の第 1・第 2 変化形容詞の女性複数形の語尾の形である事に気づくと, その理解は容易である。それではこの形容詞語尾 (男性単数形は -aceus) はどのような意味を持っているだろうか?

ラテン語は一つの語の形を様々に変化させて、多彩な意味を作り出すことができる言語である。その中でも接頭辞や接尾辞は重要な役割を演じる。このシリーズの(1)(永益 2009)でも参考書としてあげた『Botanical Latin』(Stern 1992)をお持ちの方は p. 299 を開いてみていただきたい。そこにはラテン語の形容詞をつくる様々な接尾辞 (Latin adjectival suffixes) が並んでいる。このうち 2 番目の -aceus, -a, -um が目的の項である。後ろに書いてある -a, -um はこの形容詞が第 1・第 2 変化形容詞 (Stern では Group A; 同書 p. 90) であり、女性単数では -acea, 中性単数では -aceum と変化することを表している。そして、意味は「indicates resemblance; noun base 名詞に基づいて類似性を示す」である。例として rosaceus, rose-like が挙げてあるが、これを女性複数形にすると rosaceae である。

ラテン語では形容詞がそのまま容易に名詞として扱われうる。すなわち「バラのような」という形容詞が、その複数形で名詞化されると「バラのようなものたち」となる。それではなぜ女性形なのか? その理由は簡単に想像できる。科名では「バラのような(植物)たち」を示しているわけで、植物 *planta* が女性名詞であるため、(*plantae*) *rosaceae* なのだ。

もう一つ、なぜ属名の「属格単数形の」なのかだが、それはラテン語の名詞では、主格ではわかりにくい語幹部分が属格単数形のときにはっきり現れるからである。そのためラテン語の辞書では名詞は必ずその属格形とともに掲載されている。つまり属名の語幹(語から語尾を除いたもの)に接尾辞をつけることが要求されているわけである。命名規約第 18 条実例 1 には、属名とその属格形、そしてそれに由来する科名の例が挙げてある。

さてそれでは亜科はどうだろうか。亜科名の語尾 -oideae は男性単数形では -oideus。さきほどの『Botanical Latin』で接尾辞の意味をみるとやはり、indicates resemblance; noun base である。

目の学名の語尾は -ales である(第 17 条)。これも形容詞の接尾辞の一つで、その男性単数形は -alis。『Botanical Latin』(p. 299)では後ろに -is, -e と書いてあるが、これはこの形容詞が男性および女性単数では -alis, 中性単数では -ale と変化する第 3 変化形容詞 (Stern では Group B; 同書 p. 92) であることを示している。その意味は「indicates belonging or pertaining to; noun base 名詞に基づいて所属や関係を示す」と書かれている。複数形語尾は男性も女性も -ales であるが、これも女性複数形とみなしてよいであろう。

永益英敏. 2009. 学名のラテン語 (1). 日本植物分類学会ニュースレター 33: 14-15.

Stern, W. T. 1992. Botanical Latin: History, grammar, syntax, terminology and vocabulary, 4th ed. David & Charles, Newton Abbot.

## 研究での失敗談

### ～ふりかえれば、失敗～

西田 佐知子 (名古屋大学)

人間、「自分は完璧!」と思う人は少ないとは思いますが、さすがに何か仕事をしているときはそれなりに慎重で、やっている最中からそれが失敗につながるとは思わずにいるも

のです。そして、終わった後で振り返って、冷や冷やするということも多いでしょう。ましてや、状況のよくわからない海外では、「かき捨て」にしたい恥も多いことと思います。私がはじめて海外でフィールド調査に行っ

たときの話をしてします。それは1995年の1月でした。そのころ私は大学院生で、アメリカの研究施設に留学しており、せっかくアメリカに来ているのだからと、南米でのフィールド調査に加えてもらったのでした。調査地はギアナ三国の真ん中、スリナム共和国（旧オランダ領ギアナ）。現地の人が有用植物を採取している森と、滅多に人の入らない森の植生を比較するという、民俗植物学と生態学をあわせたような調査でした。ちょっと変わっているのは、その「現地の人」というのが、南米にもかかわらず黒人であるということ。スリナムには昔、奴隷としてつれてこられたアフリカ人が大勢いたのですが、その中で奴隷の境遇から逃げ出した人々が、都会の生活とは縁のないまま、焼き畑をして暮らしているのです。ですから、有用植物といっても本来の「現地民」のそれとは異なっている可能性もあり、民俗植物学としてはやや複雑な話でした。

私はそんな研究目的に深く思いを巡らすこともなく（情けない）、はじめての海外フィールドに心躍らせていました。向かった場所は、もう名前も覚えていない小さな村で、首都から小さなプロペラ機に乗り、草原の滑走路を降りたあとボートで河をさかのぼり、それからまたカヌーで浅瀬をさかのぼったところでした。電気も電話も水道ももちろんなく、街との連絡手段は村長の持っている無線だけ。人々はカヌーで畑と家を行き来し、家には家畜が走り回り、男も女も上半身は裸でした。穏やかで明るい人たちでしたが、ご馳走というのが、生肉を干しつつ、中にウジを這わせて熟成(?)させたものというのは喜ばませんでした。

私たちの仕事というのは、森（今回は人が使っていない方の森）に調査地を設置し、すべての木に番号を振って直径と高さを測定。そのあと枝を採集し、ひたすら標本を作る・

できれば同定する、というものでした。言うは易し、行方は難し。熱帯の森はひたすらじつとりと暑く、動くほどにつらい。木の多くは鋭いトゲをもつヤシの仲間。三種類ほどのヤシが頻繁に出てくるので、種名がわからない間はそれぞれをあだ名で、「spiny palm（とげとげヤシ）」「G O d-damn spiny palm（神を冒瀆する言葉+とげとげのヤシ）」「G O d-damn f O O king spiny palm（神を冒瀆する言葉+人前では言うべきではないけど、アメリカ映画などでよく出てくる言葉+とげとげのヤシ）」と呼び分けていました（後ろに行くほどトゲがひどい）。これら、たいへん分かりやすいあだ名のヤシに抱きついて、胸高直径を測らなければなりません。メジャーを木に巻き付けたとたん頭からアリの群れがおそってきて、とにかく人のいないところまで走って行って、服を脱いでアリを追い出すということもありました。必要とされるのはひたすら体力と根気だけという日々でした。

ハプニングもありました。一番びっくりしたのは、ある雨の夜のことで。私たちは森の近くの作業小屋を借りて、夜は、小屋の前の土間にビニールシートの屋根を広げ、その下にハンモックを並べて寝ていました。ある晩、雨がしとしと降っている中寝入ったところ、夜中にぎしぎし…と音がします。不審に思って目を覚ますと、ビニールシートに雨がぼつてりと溜まり、今にもシートやハンモックを支える柱ごと崩れ落ちそうです。皆でびしょぬれになりながら必死でシートに穴を開け、下敷きになるのをかろうじて免れました。

そんな大変な日々ですが、楽しいこともありました。お風呂代わりに河泳ぎは、開放感あふれた楽しいひととき。ときおりカヌーで行き来する人たちは、物珍しそうに通り過ぎていきます。調査は暑くつらいですが、調査地から家路へと帰る道は、今日も仕事したなあという充実感と、鳥の声に満ちた林を歩く



至福のひとつときです。

そんなこんなで一ヶ月の調査もあっという間に終わりました。めでたしめでたし…。とそのときは思っていたわけです。ハプニングはあったけれど、その都度みんなで力を合わせ解決できた。みんな、なかなか頑張った、と。しかし、私たちの失敗は、帰るときにわかったのです。

今回の調査ですべてが調べ終わったわけではないので、当然私たちは再来について村長と話合いました。しかし、村長は再調査を完全に拒否。そのときは拒否の理由がよくわからなかったのですが、後々ガイドや通訳と話し合ううちに、理由がわかってきました。私たちの多くの振る舞いが、現地の人たちの神経を逆なでしていたのです。

まず、毎週ある決まった曜日は神聖な日であって、森に入っただけではいけないのです。そんな現地のデリケートな規則を破り、まったく無頓着に土足で入り込んだ私たち。ちなみに、森にはあちこちに罾がかけてあり、下手な場所を通ると矢が飛んでくるところだったそうです。また、河にはワニがいて、現地の人にとって泳ぐなど、とんでもないことだったようです。沢山のタブーを破っていた私たちは、人間としてあるまじき存在だったのです。その上、私たちは森の近くに寝泊まりするからと、荷物を運んできたカヌーを引き取っ

てもらい、所定の日までカヌーなしで暮らしていました。村の人たちからすれば、カヌーは生活の足。足がないののうのうと生きている私たち、しかも肌がなまっしろい（白い）。村の人たちは最終的に、私たちを幽霊だと結論づけたのでした。幽霊が突然やってきて、森の近くで人間とは思えない振る舞いを数々行い、自分たちが守ってきた生活を荒らしていく…。奴隷というつらい境遇から逃れて、また捕まる不安を抱きながらひっそりと暮らしていた人たちの子孫は、きっと、さまざまな取り決めやジンクスで自分たちを守ってきたのでしょう。それらを完全に無視した私たちは、横暴の極みだったわけです。今更ですが思ったのは、このときの調査は、人とは関わりない森が対象だったこともあり、現地の人と語り合うことがほとんど無いものでした。村への挨拶もそこそこに、森に引きこもっていた私たち。これでは村人も不安になって当たり前です。植物の調査といっても、そこに住む人たちとのつながりがいかに大切か、身にしみた経験でした。

「幽霊はもう来るな」といわれ、情けない気持ちで村を後にした私たち。そんな気持ちも知らずに、怖いながらも物珍しさで後をついてくる村人達。プロペラ機のエンジン音が高鳴る中、小さな窓から見えた、たくさんの村人達の無邪気な顔が目には焼き付いています。

## いきもの便り

### コマツヨイグサに似たアカバナ科植物

秋葉 由紀彦（東京都文京区）

私の知人で、趣味で身近な花の撮影をおこなっている日浦真宏氏が、アカバナ科の何だかわからない花を、2009年6月13日に見つけました（図1）。場所は東京都新宿区の車道沿いの植え込みの中で、花は8月初旬まで咲いていました。

日浦氏と私の観察をまとめてみますと、花

弁は約6mmの淡い黄色のハート形のものが4枚重なったカップ状で、縦に4本の溝がある巨大なマッチ棒の先のような黄色の雌しべが花弁に比べて突き出ており（図2）、それを8本の雄しべが取り囲んでいます。花弁はしぼむと橙色になり、その際に雌しべは4裂します。開花が確認できたのは、午前5時・午前11時30分・午後3時で、午前5時30分・

午前7時・午後0時には橙色にしぼんだものが確認できました。萼の長さは約6 mmで、その先に長さ2 mmほどのスパイク状の刺があり、外側には長さ2 mmほどのまっすぐな白い毛が、密生しています。白い毛は花柄まであり、葉の表裏・茎には短毛が生えています。数本自生していたものうち、1本だけ倒れた茎から、垂直に4本の茎を出しており、その中の最も成長した茎の葉の縁は波状深裂で、それ以外の茎は直立して分枝せず、葉は全縁に近い波状でした。全ての茎は1本ずつ独立して生えていました。果実は長さ2 cmほどの棍棒状で、先のほうが4裂して、種子を出します。

花の無い状態のものを標本用に小石川植物園の邑田園長まで届けました。届けた後から、花が咲いている状態のものが必要であることを知った次第で、その点では失敗したと後悔しています。2人とも趣味で花の撮影をしていただけで、標本作製など無縁の者でした。

その後、1 mくらいに直立したコマツヨイグサを初めて見て、これが非常に良く似たものであることに気がつきました。コマツヨイグサの花の大きさには2型があり、そのうち



図1. 2009年7月13日5:01 AM 日浦真宏撮影。

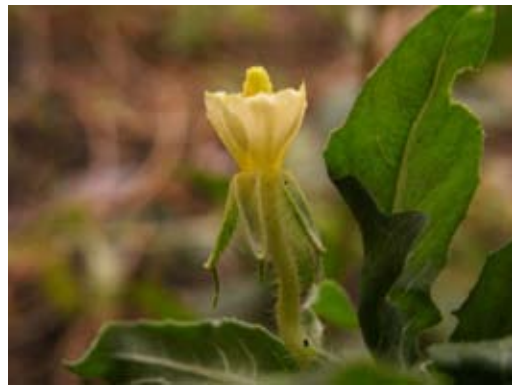


図2. 2009年7月16日3:27 PM 秋葉由紀彦撮影。

小さな花を咲かせるものは花の色が薄く果実も短いので、今回発見した花と似ています。しかし、コマツヨイグサは雌しべが花弁に比べて突き出ることなく、大抵咲いている時から4裂しており、萼の先の刺と萼の外側(蕾)の毛も短いので、今回発見した花は別のものであると考えられます。

9月中旬に発見場所に残っていたものを見たら、葉のつき方・形状が変わっていました。茎の先端に放射状に葉を広げ、その葉の形は上部が全縁に近い波状で下部が波状深裂という、コマツヨイグサのロゼット時のものに似ているものに変化していました(図3)。このように変化するとは想像もしていませんでした。更に地面に接して分岐した部分からは、根が出ていました。

コマツヨイグサに似ているので、今のところ「コマツヨイグサモドキ」と呼んでいます。



図3. 花期終了後の茎の先端。2009年9月16日10:59 AM 秋葉由紀彦撮影。

## 日本植物分類学会第9回大会「発表・参加申込書」

以下の内容について、必要事項を記入の上、メールまたは FAX でご送信下さい。

宛先：日本植物分類学会第9回大会準備委員会

メールアドレス：jsps9@m.auecc.aichi-edu.ac.jp FAX 0566-26-2310

1. 名前（ふりがな、またはローマ字）：
2. 所属：
3. 所属の短縮表記：
4. 連絡先住所：〒
5. TEL：
6. FAX：
7. E-mail アドレス：
8. 発表（該当する番号を記入して下さい）：
  - する：（1）口頭発表 （2）ポスター発表
  - しない：（3）発表しない （4）共同研究者が発表する（発表者氏名       ）
9. 口頭発表賞・ポスター発表賞へのエントリー（パーマネントポストに就いていない人のみ可）：
  - （1）する （2）しない
10. 口頭発表での媒体（どうしても OHP でという人のみ (2)）：
  - （1）パソコン用液晶プロジェクター （2）OHP
11. 懇親会（該当する番号を記入して下さい）：
  - （1）参加する （2）参加しない
12. 全発表者氏名・所属（演者の右肩に \* 印）：
13. 全発表者氏名（ローマ字）：
14. 現在求職中の表示の希望：
  - （1）希望しない （2）希望する
15. 演題
16. 大会参加費（振込期日に注意すること）：       円
  - 1月29日までに振込の場合                   4000円（一般）2000円（学生）
  - 1月30日以降振込と当日申込の場合       5000円（一般）3000円（学生）
17. 懇親会費（振込期日に注意すること）：       円
  - 1月29日までに振込の場合                   7000円（一般）5000円（学生）
  - 1月30日以降振込と当日申込の場合       8000円（一般）6000円（学生）
18. 昼食弁当代（3/27 500円）：                   円
19. エクスカーション交通費（1500円）：       円
20. 発表要旨集別売（1部1000円）：           円

\*大会参加費には発表要旨集1冊の代金が含まれています。

21. 合計金額：                   円

22. 振込郵便局名：

23. 振込日：

郵便振替口座番号： 00820-3-206654

口座名義：日本植物分類学会第9回大会準備委員会